

## 一碗の茶

父と二人静かに居て、大晦日の夜の茶を啜る——。かういふ聊かな事を私は四、五年來空想して來た。

大晦日の夜には福茶とかいふものを淹れる習慣があるさうであるけれども、それは私の国許には一般に行はれないらしく、もとより、私の家には憶えのない事だった。私の空想は何等これに拠るところはない。年越蕎麦、これも私の家では近年になつて覺えた事に過ぎない。が、明日は元日といふのに湯ざめや睡気を堪へて散々待たされた上に、やうやくずる／＼啜りこむなどは馬鹿／＼しくもあり氣忙しくもあり、あれは当然商家などに委せてしまつてい、行事だと思つてゐた。先づ私の父はそば好きでもなかつた。勢ひ、大晦日の夜更け父と二人一間に落着いたなら、自然第一に出る言葉は、

「……お茶を一つ。」

勿論、その座に母もゐて差支へはなかつた。多くの弟妹たちが賑かに団樂を作つてゐても困りはしない。然し私の空想裡に現れてくるところは何時も父子二人ぎりの対座であつた。そして勝手な空想にはもう少し小面倒な條件が附いてゐた。先づ其処は壁色に和した襖の色、踏心地のいい絨氈、程よい炭火、明るい燈火、春を待つ床の幅。要するに大晦日もや、に更けそめ

た夜の落着いた一間である事が大切であることは言ふまでもなく、更に、一碗の茶を黙々と喫する父にも私にも、行く年を顧みてよし満足はなくともさしたる不足の念もなく、来る年を想うては聊かなりとも希望を持つ……言はゞ表にまでは現れぬ微笑ほどの打ち寛ぎの心が自ら通つてゐなければならなかつた。

この一片の空想だけは、不思議に忘れてしまはずに、數年來時折私の散漫な記憶の表に浮び出て來ては、私にさまざまの念を強いてゐた。

けれども來る年も來る年も父にも私にも幸福でなかつた。不幸であつたと言つた方が適切なほどみじめなものであつた。そればかりでなく、一兩年來父は病床に親しむ日の方が多くなつて、私の空想は心細くも現実味の乏しいものになりさうであつた。けれどもなほ私は空想を捨てなかつた。

それよりも、この空想が記憶の底から浮び出る時、寒く佗しく縮こまつた私の心の奥にも一穗の灯がともつたやうに、何時も、寒く佗びた心が温かに湿うて來るのだった。私は微かに希望をつないでゐた。

或る時、病床の父がふとかう言ふのだった。

「まあ、こんな貧乏もしやうとは思わなかつたし、貧乏にしたところでこの位が極度だらうが、そんな中にあるて、わしにしろお前達にしろさう／＼慌てもしず、まあかうして笑ひ合つてゐられるのは、それで何かしら前途に希望が持てるからだ……。」  
私は、朗らかなものに打たれて、うっかり返事をすればそれが涙声になりさうなので辛うじて苦笑にまぎらした。が、勿論